

雑 録

再びオケラ屬 (*Atractylodes* DC.) に就いて

北 村 四 郎

筆者は本誌第四卷 (1935) pp. 176-178 にオケラ屬が *Atractylis* より區別され *Atractylodes* を用ひるべきを論じ並びに日鮮の野生種に就き論じたが、今度は支那産の種類につき言及し度いと思ふ。我が國にては古く松村任三博士の蒼求の學名に求いて (植物學雜誌四卷 435-440)、松田定久氏の (同雜誌二十五卷 352-363) の研究があり、近年中井教授 (同雜誌四十二卷 p. p. 477-479)、小泉教授 (*Florae Symbolae Oriental-Asiaticae* (1930) pp. 3-6)、の研究がある。最近これは植物分類學者ではないが趙燭黃といふ人の祁州藥誌を入手した。これに支那に於ける蒼求、白求の研究が可成り詳しくされ多數の寫眞が入つてゐる。この著書を見ると藥品をとる原植物の全體を大きな寫眞を入れて出してゐるので、藥品に植物學名を附し得るのである。學名の檢定は林鏞氏に従つてゐるのであつて、この藥誌は *Les Composées Chinoises de L'Herbier de L'Academie de Peiping* Vol. III (1935) pp. 132-134 と同じ材料で研究されてゐる。林氏の説は我が中井教授の説を採用して居る。この藥誌の原植物に就いて私見をのべる。

1) *Atractylodes macrocephala* KOIDZ. はシーボルト氏が和蘭に持ち歸つた我が國栽培の白求にもとずき小泉教授の記載されたものであるが、我が國にはオケラ一種が野生してゐるのみで *A. macrocephala* KOIDZ. は未だ發見されてゐない。故に支那から享保時代に持ち來たされたと思つてゐた。草木圖説のビヤクシュツはこれである。この藥誌の第六圖版 *Atractylis ovata* THUNB. として出してあるものは私の考へに依れば *A. macrocephala* に適る様である。草木圖説の記載とは管狀花が紫色なることも一致してゐる。支那では於白求と稱し原産地は浙江天目山である。林氏が *Atractylis ovata* (non THUNB.) LING in *Contr. Inst. Bot. Nat. Acad. Peip.* III (1935) p. 132. としてゐるのはこの標品である。この標品は花が蕾だから總花が頭花に比し大變大きくなつてゐるが開花すれば *A. macrocephala* の頭花とならう。趙氏に依れば「浙江於潛縣に産するから名を於白求と云ふ、於白求はこの植物の地下莖を乾燥した者だ、於潛縣の野生品は取り盡したので求に應じがたいが、土人に依れば於縣後山脈、及黃塘至遼東橋一帶、西流水四十里之地にあると云ふ。尙於白求を平市では金線於求と云ふ。」尙生藥の記載寫眞が多數あるがこれは小生の専門外であるから割愛する。尙台

求、平市にて仙居於求といふものは於白求の栽培品と大同小異なりと云ふ。

2). *Atractylodes ovata* DC. は長崎に栽培された植物にもとづいて最初 THUNBERG 氏に依り記載されたものであり、其の Upsala にある原標品のスケッチを小泉教授より拜見させて頂いたが草木圖説のサウジュツと同じである。type にも草木圖説の圖にも地下莖はついてゐないが他の諸種の本草書を参考にして考へるに、我が國にて昔サウジュウと稱し薬用にした植物は地下莖は多少垂直に發達してゐる様である。オケラは (*Atractylis ovata* の type や草木圖説の圖の様に一つ葉になることもあるが) 地下莖は通常横走する。それで *Atractylodes ovata* とオケラとを同一にするには (嘗ては同一とも考へたが) 目下どうかと思ひ區別してゐる。祁州藥誌第 10 圖版普通白求 (湖廣求) *Atractylis ovata* THUNB. としたものは其の地下莖は古の本草書のサウジュツの地下莖に似てゐる。但しこの葉は三裂してゐて一つ葉でない點は *Atractylis ovata* の type とは一致してゐない。然し三裂葉のものに一つ葉の出ることはよくある事である。趙氏に依れば湖廣求是南方藥肆が之を備へてゐるが平津には備へてゐないといふ。圖版の植物は杭州藥市に地下莖を求め、これを栽培開花せしめたものである。普通白求、即ち湖廣求、雲頭求、鷄腿求、狗頭求の類は白求中の劣品だと云ふ。薬用にはよろしくないといふ。これは筆者の考へであるが趙氏の云ふ普通白求中には *Atractylodes ovata* の他に植物分類學的には種の異なるものが入つてゐるらしく感じられる。趙氏は普通白求の産地は江西、安徽、湖北、浙江としてゐる。最近 HANDEL-MAZZETTI 氏が書いた湖北省西部の *Atractylodes carolinoides* (HANDEL-MAZZETTI in Notizblatt Bot. Gard. Mus. Berl.-Dehlem XIII (1937)p. 642). なんかもやはり薬品として取り扱はれてゐるかもしれない。

3). *Atractylodes lancea* DC. これはやはり長崎に栽培されてゐたサウジュツと稱せられたものが原品となつてゐる。我が國には勿論未だ野生してゐることは知られてゐない。THUNBERG 氏が持ち歸つたものでこの原品も小泉教授のスケッチを拜見させて頂いた。今このスケッチにより論ずるがこの標品は地下莖はついてゐない。一見したところ *Atractylodes chinensis* DC. によく似てゐるが、少し莖を抱くところが廣く莖を抱き廣い葉を有する満鮮産の *Atractylodes koreana* に似てゐる。(いづれにせよこの後述の二種は近縁のものである)。葉柄のない點が *Atractylis ovata* や *Atr. macrocephala*, *Atr. japonica* の類と區別される。未だ確信あるわけではないが、*Atractylodes lancea* は *Atr. chinensis* と同じであるかもしれない。それは兎に角祁州藥誌の第一圖版 *Atractylis lancea* THUNB. は私の見るところでは *Atractylodes chinensis* KOIDZUMI である、この寫眞に依ると地下莖は長く横走してゐる。これは北京研究院の植物園で栽

培してゐるものの圖であるが、*A. chinensis* は北支那に普通のもので私も佐藤潤平氏より送つてもらつた標品を持つてゐる。この根が蒼朮である。河北、山西、陝西、山東、江蘇、湖北等に産すと趙氏は書いてゐる。

茅朮といふのがある。これは非常に残念なことに圖が入つてゐない。趙氏は亦屬於蒼朮之一なんて書いてゐるが別の物らしい。地下莖は長 4-6 cm. 徑 1.2-1.7 cm. 作幾分念珠狀縱橫錯走之根莖；外面呈黑褐色而微蒼、堅小而有結節、有時帶捲曲之福根、短小而硬脆。橫切面爲不齊之圓形或橢圓形、全面近乎純白、分布灰褐色及至赤褐色之小斑點（精油貯蓄器）、放置一二日、即有白色結晶性之粉雪析出、北産者不能也；皮部之厚、約 1-2 mm. 皮部與木部、現褐色之圖帶極明。餘同上とある。これは江蘇茅山産品とある。LING 氏が鑑定してゐるんだから *Atractylodes chinensis* に似たものだらうが實はこれが *Atractylis lancea* であるてな事にならぬともかぎらぬ。茅朮の原植物形態を抜き書する。葉單出者居多、亦有 3 裂者、花大部白色、花頭較小、圓筒狀或鐘狀、羽狀、總苞片、短於花冠、藥離生。これだけでは同定は難かしい。

4) 祁州藥誌圖版 2. 關蒼朮 *Atractylis lyrata* SIEB. et ZUCC. とあるものは私は *Atractylodes japonica* KOMZ. と考へる、*Atractylodes lyrata* が何であるかは別に記したからこゝでは略する。

要するに *Atractylodes ovata* At. *lancea* の原産地は未だ確言は出来ぬが大體見當はつて來た様に思ふ。*Atractylodes macrocephala* の原産地は浙江である様だ。將來支那の植物が多數我が國にもたらされ又我が植物學者も實地について採集し研究すれば *Atractylodes* 屬も明かるくなるだろうと思ふ。終りにのぞみ小生研究の基礎をなす *Atractylodes* 各種の原品の圖を拜見させて下さつた小泉先生、並びに祁州藥誌を小生に下さつた濱田秀男博士に深謝する。

紀伊山脈東部植物區系

小泉源一

紀勢和半島中部に東西に亘る中央構造線の代表たる紀ノ川、橿田川以南の紀伊山脈は玖摩關東太古山系の山脈にして、紀伊、大和、伊勢、志摩四國の山地を成す、此の紀伊山脈東部とは橿田川流域以南の山地にして伊勢灣に對し志摩伊勢の半島狀の地域で紀州は北牟婁郡のみを包括する。

本地域の植物自然群落は人工による伐採破壊甚しく殊に舊藩時代より尾鷲方面は土井八郎兵衛一族の殖林作業の爲め全く自然状態は破壊されてある、然れども本地域には古來我國最大の神宮神域あるのみならず、神宮所屬の別宮、攝社、末社、所管社